

秋山しゅうざんに僧そうを訪たずぬ

本もと宮みや三さん香こう

寺門じもん何いずれの処ところか
白雲はくうん封ふうず

紅樹こうじゆ千重せんちゆう巖がん万重ばんちゆう

忽たちまち詩人しじんをして深省しんせいを発せしむ

衆山しゅうざん皆みな響音ひびく一いつ声せいの鐘かね

【作者】本宮三香（一八七八〜一九五四年）（明治十一年〜昭和二十九年）・千葉県香取郡津宮村（現佐原市津宮 さわらしつのみや）に生まれる。名は庸三（ようぞう）、字は子述（しじゆつ）、別に風土子（ふうどし）と称し、三香は号。幼にして漢学漢詩を学ぶ。日露の役に従軍、第三軍に属し戦場でも詩を作る。三十九年凱戦後故山に帰り悠々自適の生活を樂しむ。大正二年「江南吟社」を設立、のち水郷吟詠会を組織し木村岳風の日本詩吟学院の講師を委嘱されるなど作詩及び詩吟の普及に力を傾けた。作詩五千、酒と詩を愛した。昭和二十九年十二月二十九日没す。年七十七歳。